

宗祖親鸞聖人750回御遠忌

真宗大谷派東京4組 お待ち受け大会 記念講演

「今、いのちがあなたを生きている—真のよりどころを求めて—」

大谷大学教授 一楽 真 先生

「浄土が真のよりどころ」という私たちへの問いかけ

こんにちは。ただ今ご紹介を頂戴いたしました一楽と申します。

日ごろは京都の大谷大学で、学生たちと一緒に親鸞聖人のみ教を学ばせていただいているのであります。今回、東京四組のお待ち受け大会ということで、ご縁を頂戴いたしました。こういう盛大なお待ち受け大会を勤められることは非常に大事であり、ありがたいことと思っております。

私もいろいろお話しする機会を頂戴いたしますけれども、音楽ホールというところでお話をさせていただくのは初めてであります。先ほどのお勤めも非常に響きが良かったですね。音楽ホールはどうかと思っていたのですけれども、ご本尊が掲げられますと、すぐ礼拝堂になりますね。蓮如上人が「ご本尊は掛けやぶれ」（御一代記聞書 69・聖典 p 868）とおっしゃるとおりで、場所を選ばずに、礼拝の場所となるということ、あらためて思わせていただきました。

今日はことに新しいことを申し上げるというわけではありません。私がこのテーマをいただいて、どのように受け止めているかということをお話し申し上げたいと思います。

「今、いのちがあなたを生きている」というのは、ご本山が掲げられたテーマでございますが、それに「真のよりどころを求めて」というサブテーマを東京教区では掲げられました。この「真のよりどころ」というのは、私なりにいただきますと、親鸞聖人が「真宗」と教えてくださった、そのお言葉です。

「真のよりどころ」、これは「あなたは何をよ（依）りどころに生きていますか」という呼びかけの言葉であります。親鸞聖人は、これを「浄土が真宗である」というように教えてくださいました。「浄土真宗」という四文字の言葉、これは「浄土が真宗ですよ」と私たちへの問いかけのお言葉であるといいただいております。

そのとおりだということになれば、私はあらためて申し上げることは何もないのですが、私自身も「浄土が真宗である」と宗祖から呼びかけられても、なかなか自分の中で、それがストンと落ちないわけです。というか、浄土も大事かも知れないけれども、あれも大事、これも大事と。

つまり「浄土が真宗ですよ」と教えられても、そのとおりでというようになかなかならない。そういう日常生活を抱えているわけです。

こういう会の時だけではなくて、日常の中で、“浄土を真の依りどころとして生きていく”ということは、どういうことなのかということをお今日は一緒に尋ねたいと思っているわけです。

「仮」――一時的な目標と、一生を貫くような依りどころ

「真の依りどころ」の「真」という字は「まこと」ということですが、親鸞聖人はお書きものの中で、これは「偽に対し、仮に対する」（教行信証信巻・聖典 p 245）とおっしゃっています。偽というのは、偽物という意味、仮というのは、仮物という意味です。

「仮」ということですが、これは一時的という意味であります。日ごろお預かりしている学生さんのことと言いますと、入学試験に合格するまでは、ものすごい勉強をされるんですね。ところが四月に入学した後も、同じように勉強をしている人は見たことがありません。それは当たり前でして、入学試験を突破するための勉強ですから、入学しても、なおもずっとやり続けるという人の方が珍しいわけです。

では入学したらどうするかというと、今度は次の就職のための準備を始めるわけです。いろいろな資格を取ったり、あるいは英会話を習いに行くとか、そういう能力を身につけるのです。それが就職に有利だという勉強を一生懸命にするわけです。

では就職したらどうなるのでしょうか。やはり会社でも、それなりの業績を上げていくために一生懸命に努力なさる。そうやって、いつもいつも目の前に何か新しい目標を立てながら、私たちは日ごろ生活をしているわけでありましてけれども、しかし一生を貫くような目標とは果たして何なのでしょう。

こんなことを聞きました。仕事を終えられた男性、あるいは子育てを終えられた女性の中に、たまに“燃え尽き症候群”という状態を呈する方がおられるそうです。仕事を勤め上げられて、定年になってしまったら何をしたらいいかわからない。こういう状態、虚しさの中に落ちてしまう。一生懸命に子育てにささげてきたけれども、子どもが巣立ってしまったら、この後どうしたらいいかわからなくなるという。会社に勤める、子育てをするというのも大変大事な目標でありますし、それが日常生活に元気を与えていたのは間違いないのですけれども、それは終わってしまえば消えていくわけでありまして。

一生を貫くような生きる力、生きていく依りどころ、それは果たして何だろうかという問題な

のですね。念のために言いますが、子育てが悪いとか、会社勤めが悪いとか、そんな話ではありません。ただ、一生を貫くような依りどころ、これを見つけないと、どこかで自分の一生は何だったんだろうかという、最後にはやっぱり虚しさが残る。こういうことを申し上げたいわけです。いろんなことをしてきたけれども、自分の一生は果たして何だったのかという、こういう問いです。

一時的な目標は現在に対してすごく力を与えてくれる。例えば、今日のお待ち受け大会ひとつとってもそうですね。一年も前からずっと準備を進められてきたということですが、たぶんスタッフの方は、今日はどっと疲れが出るのでしょうか。「ああ、終わった、終わった」となるかもしれません。でも本当はそうではないのですね。お待ち受け大会ですから。いよいよ来年の宗祖の御遠忌をお迎えするぞという、そのための行事でありますから。さらに先ほどの組長さんのご挨拶にありましたが、御遠忌はイベントで終わらせてはいけません。そこから始まるものがあるはずであります。そういうものが見つかりませんと、私たちは大きな仕事を成し遂げた途端に、終わった、終わったということになって行きがちなんです。

これを親鸞聖人のお言葉でいうと「仮」という。仮が悪いわけではありません。元気を与えてくれる大変大事なものですが、それは一生を貫くものにならないのではないかという呼びかけであります。

「偽」—依ってはならないこと

もうひとつおっしゃる「偽」、偽物。これは“人偏に為す”という字であります。人が為すこと、これが偽物という字でございます。これは依りどころにしてはならないものというように教えられます。これを依りどころとすると、必ず縛られる。逆に自分が苦しむことになるということでもあります。

これも先ほどご挨拶の中にありましたが、今の日本はどうしても経済効率、あるいは利便性のみを追求するという、その物差しで全部を計っていく。こういうことが確かに身の回りに起こっております。

それは人間についても、あの人は役に立つか、立たないか。便利か、便利でないか。こういうかたちで、ひどいときには生きている価値があるか、ないか、そこまでいってしまうことを、この偽物の物差しは持っているわけであります。

元気で働いて稼ぎをはじき出しているときには、ほとんど気がつきません。そのことに価値があると気がちな状態ですから。しかし、体がいうことを利かなくなったり、働けなくなる。あ

るいは手助けをいただいて、ようやく生活できている。そうすると、何か自分が人の迷惑になっているのではないかという気持ちに、だんだんさせられていく。

しかし、それは本当ではないのですね。一人ひとり、誰とも代わることのできないいのちを、いろんなものに支えられながら、今日もつながせていただいております。そのいのちに、上とか下とかいうことがあるのかというのが、親鸞聖人の眼なのです。それをついつい調子のいいときだけ、働けるときだけ、私には価値があり、働けなくなったら価値がなくなったのではないかと思ってしまう。これが偽物というように表現される。依ってはならないものであります。

その偽物は自分を縛るだけではありません。大事なわが子であっても、わが家族であっても、あるいは周りにいる人であっても、その物差しで計っていくということが起きる。お互いに計ったり計られたりという世界が、今あちこちで顔をのぞかせているように思われてなりません。

痛ましい生き方

私も大学におりますので、学生たちの様子に、昨今特にそれを痛ましく思うことがあります。私の大学にも心理学の先生がおられまして、学生相談室を開いていますが、相談する件数は年々増える一方です。どんな相談かと言ったら、何気ない相談もあるのです。時間割の作り方が分かりません。こういうものもあります。普通は先輩に聞いたり、周りの友達に聞けばいいのに、そういう友達が見つからないという相談です。重い相談になりますと、人間関係がしんどくてたまらない、会話がたまりませんということをおっしゃる方もあります。

これは九月号の『同朋』というご本山から出されている冊子に大阪大学の総長・鷺田清一先生（現在は大谷大学教授）が書いておられることを読んで僕はびっくりしました。こんなように書いておられます。「ついにここまできた。学食でお弁当を食べられない学生が、個室といってトイレの中でお弁当を食べている」。こういう話です。お弁当なのか、食堂で買った食べ物か分かりません。パンか牛乳か分かりませんが、それを個室、要するにトイレの部屋と言ったらいいのでしょうか、あそこでお昼ご飯を食べているんですね。なぜわざわざそんなところで食べるのかといたら、人との会話、それが疲れるのです。

特に昨今強いのですが、お笑い番組のせいもあるかもしれません。何か面白いことを言わないといけない。面白くなかったら、あいつは面白くないとレッテルを貼られます。それが大変疲れるというのです。それなら初めから一人がいいといって個室へこもる。

ですから学生たちは、授業が楽しくなります。それは授業を聞くのが楽しみなのではなくて、教室に行くと私語をしなくて済むからだそうです。隣の人としゃべっていると、先生が「やめな

さい」と言うので、隣の人としゃべらなくて済むのが授業の楽しみだと。ここまで鷺田先生が書いておられます。大変な時代だと思います。

これを学生相談室の先生は、こんなように言っておられます。昨今の学生の特徴として、傷つきやすくて、自信がない。そしてプライドが高い。この三つは絡み合っているわけですが、自信がないから、何か人の前でしゃべったりすることがなかなかできない。言い返されたら、そこでグサッと傷つく。傷つくということは、それだけ傷つけられたくないというプライドが高いからだということです。

ただ、これは若い人たちだけの問題ではないのです。誰もがそんなものを持っています。格好の悪いことを見せたくない。家の恥は外には知られたくない。こんなことで悩んでいるなんて思われたくない。これは歳をとっても同じなのではないでしょうか。

その中で、結局は周りの人と関係が切れていくんですね。周りの人は悩みを相談するお友達ではなくて、自分の格好が悪いところを見せてはいけない敵になりますね。敵という言葉は悪いかもしれませんが、いつも比べ合っていく、競い合う相手です。なかなか自分の、それこそ愚かな部分、至らない部分、あるいはこんなことで失敗したなんてことは、ほとんど見せられない。そういうことで人と人との間が切れていくということが起こっております。

厄介なのは、人と人との間が切れて、うまく生きられなくなっていっても、そのことが当たり前だというように、だんだんできてきているんですね。世の中全部がそうやって動いているものですから、そんなように生きていることが痛ましいとは思わない。人と比べ合ったり、いつも優劣を競ったりしていることが愚かだと思わない。これが、この世の中の大きな問題だと僕は思います。

自分の闇を照らすのが光

親鸞聖人で言えば、それを「闇」とおっしゃった。例えば、本当に闇の中で暮らして、光の存在をまったく知らない場合は、これは自分が闇にいることに気が付かないわけです。光がさすということは、自分は今まで闇の中にいたということに気がつくということだと。

これは具体的な光とか、太陽のことを言っているわけではありません。自分の今までのものの見方、これが間違いないと思っている。これを闇に譬えているわけです。その間違いないと思っていた生き方が実は痛ましいことになっていた、自分でも自分を苦しめることになっていたという、こういうことに気がつくということが、これが光に遇ったということだと譬えられるわけです。

ですから、仏さまのことを光と呼んだり、あるいは浄土のことを光に譬えたりしてくださいますが、これは決して、ピカッと光る光に会うということではありません。自分は本当のことが見えていなかったなということに照らし出されるということが、光との出遇いなのです。

先ほどからのことと言えば、真宗に出遇う、本当の依りどころに出遇うということは、これは一時的な、仮のものだったなということが明確になる。あるいは真宗に出遇うことによって、これは依ってはならない偽物だったんだなということがはっきりする。これが真の依りどころということとの出遇いの中身なんです。

“わたし今日から真の依りどころを手に入れました”ということではないのです。本物に出遇うところに、必ず今まで当てにしてきたものが仮だったんだなと、本当ではなかったんだなということが、必ず起こるといふことであります。今までの生き方をそのままにした上で、今日から真宗を手に入れましたという、そういうプラスアルファみたいな話ではない。今までのあり方を問い返すようなかたちで、真宗というのは我われのところに来てくれるわけですから。その意味では聞いて楽しいとか、面白いというわけにはいかないのです。

世間のお笑いの話であるとか、楽しませてくれるお話であれば、自分の生活まで揺さぶられることはありません。仏法の話、真宗の話は、あなたが今まで当てにしてきたことは本当ですか。それは目先の一時的な目標ではないですか。さらにそれは、依ってはならない偽物ではないですかということ、を、どんどんどんどん問われるわけですから。今までのあり方が揺るがされるということなんです。

人と比べる生き方

これは今年、私が担当している学生の中で本当に日々実感していることですが、世間の物差しの中でつらい思いをしてこられたんだなという学生さん、何人かお預かりをしております。中学校でもものすごいじめに遭った学生さんがいます。そのことを僕によろしゃべってくれたなと思います。しかし、その経験の中から彼は、今どんなところにいるかといったら、いじめたやつを見返すために勉強しているという。俺は大学を出て、こういう就職しましたということをするために一生懸命に今自分をステップアップしているわけですから。いじめられたことが、未だにものすごく根深いのです。

でも授業で、そういうことが痛ましいとか、愚かだということをお陀はおっしゃると聞くわけですから。お陀の言葉や親鸞聖人の言葉を紹介すると、では比べてはいけないのですか。比べる人間は許さないんですか。そういう問いかけを授業のたびごとに彼から受けています。例えば前期の

レポートを出すときにも、仏陀はこう言っていますとまとめますけれども、でも僕は比べることをやめられませんか書いてもいいですか、と。そう書いたら、先生は落としますか、と。そういうように聞かれる。一緒に考えてもらう授業ですけれども、それがやっぱり成績につながるものですから、こう書いたら落ちるんですか、通るんですかと。こういうことを大変気にしているんだなということを思われます。

これは、僕自身もずっとそういう世界をくぐってきたなということが思い出されます。いつも競争ばかりしていますね。彼までの表現は取らなかつたかもしれませんが、心の中で、いつかあいつより上にいってやる。その根性で生きてきているわけです。

自分も人よりも一歩でも半歩でも上に行くという生き方、これが実は痛ましいと言われていることが、これはなかなか届かないということを本当に思います。届かないなということをいうと、何か私にもう届いてしまっているかのように聞こえるかもしれませんが、私の中にも、その根性が今も動くわけです。

しかし、人と比べて上にのし上がっていくという生き方は、どこまで行っても、これは安心できないですね。例えば、寿命の長さで比べる場合でもそうです。九十歳までいのちをいただいた。そのことを素直に喜べる場合もあるのでしょうか。しかしもっと元気で長生きをしている人を見ると、私はまだまだだなと思うかもしれませんね。何か華々しい生き方をした人の人生を紹介されたりすると、自分はしょうもない人生だったというように思ってしまう。つまり人と比べたら、本当に私は私でよかったということにならないのではないかと。そんなことを、いま若い学生から教えてもらっているわけです。

愚かな私だからこそ、教えを聞く

結局、周りにたくさん人がいても、仲間ではないのですね。やっぱり敵。比べ合う、競争相手なんです。これが、つながっていくことの難しい現代社会の一面ですね。

でも考えてみると、ずっとそうだったのかもしれないです。親鸞聖人からは八百年、亡くなられて来年で七百五十回忌をお迎えするわけですが、生きられた時代は約八百年前です。お釈迦さまが生きられた時代は、今から約二千五百年前です。その時代もやっぱり比べ合うことが止まぬ。自分が正しいというように、いつも思いたい。こういう心が動くわけであります。

例えば親鸞聖人の時代で言いますと、念仏して共に同朋であるということをおっしゃった。周りにいる人は競争相手ではないよ、お互いに悩みも抱えているし、失敗することもある。思わぬかたちで人を傷つけてしまう、危ういものを抱えているんだとおっしゃった。そういう愚かな私

だからこそ、教えを聞いていかねばならない。どうにもならない自分というところが親鸞聖人の立っておられるところですね。ですから周りにおられる人を愚かと責めるのではなくて、一緒に教えを学んでいかななくてはならない。こう言われたのが親鸞聖人という人だと思います。

ところが親鸞聖人の教えに出遇ったお仲間の中でも、やっぱり私の方がちゃんと聞いたと。私の方が親鸞聖人の心を受け止めているのだ。私の念仏の方が本物だと。こういうことを競争し合うわけです。ですから親鸞聖人が生きておられるときも、門弟、お仲間の間でもいさかいが絶えない。そういうことが起こってきます。

それがかたちになってまとめられたのが、親鸞聖人のお手紙です。また『歎異抄』という書物が、その様子を私たちに伝えてくださるのです。親鸞聖人が亡くなられた後、そういうことに拍車がかかりまして、同じ親鸞聖人の教えを聞いた仲間の中で、どちらが本当か、どちらが間違いかという争いばかりが続いていくわけです。このことは何とも悲しい、歎かわしいと言って書かれたのが『歎異抄』という書物です。だからどうしても自己主張に陥る。そこにあるのは、自分の方がちゃんと分かっている。自分の方が立派だという。相手と比べる心がうごめいている、渦巻いているのです。

“自分ほど…”という執われ

お釈迦さまの時代のことも紹介をしておきたいと思います。お釈迦さまのお弟子さん、いろんな有名な方が残っております。でも、お釈迦さまのお顔をご覧になって、お釈迦さまに直接お会いになっても、お釈迦さまのおこころをいただくことは非常に難しかったというエピソードがいくつも残されています。

例えば、有名な人で提婆達多がいます。この人は、お釈迦さまのいとこであります。お姿も大変きれいだということで、お釈迦さまの後継ぎになろうと自分で考えていたのです。提婆達多本人は非常に真面目なのです。お釈迦さまはだんだん年を取ってこられる。あと教えを引き継いでいくのは、この私だと。大真面目に。ところが、お釈迦さまにそのことを申し上げると、あなたには野心がある。仏教の教団が大事なのではなくて、教団のトップになりたいだけだと見抜かれるわけです。それを逆恨みしまして、提婆達多は、しまいにお釈迦さまを亡き者にしようと考えました。

おかしい話ですね。お釈迦さまを尊敬して、お釈迦さまのお弟子になっているのに、お釈迦さまが自分の思いどおりに動いてくれないと、そのお釈迦さまですら邪魔者になってくる。尊敬していたはずのお釈迦さまですら亡き者にしようと考える。提婆達多という人は、お釈迦さまの教えをよく聞いていた人です。初めから悪い心を持って生まれてきた人間ではありません。本人は

一生懸命にお釈迦さまの後継ぎになっていこうと、ある意味の責任感を持っていた人です。それが自分ほど、うなずいている者がいないという思いにがんじがらめになる中で、そこまで行くわけです。

もう一人だけご紹介しておくと、この提婆達多のお友達に、似たような人がいます。クカリといます。ちょっと耳慣れない方かもしれませんが、『浄土論註』で曇鸞大師がその名前を挙げられておられます。このクカリは大変生真面目で、お釈迦さまの言いつけをいつもきちんと守っていたそうです。その中でひとつの事件が起こるのです。どういう事件かというと、舍利弗という智慧第一の仏弟子が、托鉢の道中で一軒のお家に上がり込んでしまう。

お釈迦さまの教団では、托鉢というのは、まさに鉢にいのちを託するものです。それについて決まりがありました。たとえば、貰いやすいところへ行きたくするのはやまやまですが、それは執着を生むから、同じ家にばかり頼ってはいけません。これは厳しい戒めなのです。それから、その家に上がり込むようなことは絶対にしてはいけません。つまりべったり仲良くなってしまうと、もっと執着を生んでいく。とにかく執着を離れなさい。執われの心を離れなさいというのが仏陀の教えの基本なのです。ですから家も持ちません。定住する場所も決めません。ここは俺の土地だということを言わない。そして鉢一つにいのちを託して托鉢しながら、その日その日の糧を得ていくわけです。

その中で舍利弗が、あろうことか一軒の家に上がり込んでしまった。それをクカリが見つかるわけです。舍利弗と言えば、お釈迦さまの第一の弟子と言われるぐらいの人ですから、「お釈迦さま大変なことが起きました。あの舍利弗が托鉢の途中に一軒の家に上がり込みました」と。「しかも具合の悪いことに、その家には若い女性がいました。」それでクカリの邪推はますます火に油を注ぐようになったんです。

それでお釈迦さまに注進というか、告げ口するわけです。そしたらお釈迦さまの反応は意外でした。「舍利弗がそんなことをしていたのか、よしじゃ叱っておく」とはならなかった。逆でした。「舍利弗は執われの心から一軒の家に上がる。そんなことはあるはずがない。ましてそこに若い女性がいて、そのことを目当てに上がるはずはない。あの日はたまたま大雨が降っていて、雨宿りする場所がなくて、雨宿りのためにたまたまその家に上がっただけだ」と。

そうしたらクカリは、「ああ、そうですか」と言えばいいのに言わない。「なぜですか。お釈迦さまが日ごろから言っておられる托鉢の途中に家に上がってはいけないということを破ったのです。それを私はちゃんと申し上げているのに、舍利弗をかばうとはどういうことですか」と。

自分を褒めてもらおうと思っていたのかもかもしれません。私はちゃんと約束を守っている立派な

弟子だと思っていたかもしれませんが、舍利弗の方をお釈迦さまは援護なさった。それでカッときた。それに対してお釈迦さまはもういっぺん言います。「そうではないんだ。執われの心から上がり込んだのではないんだから、そう言い立てるな」と。しかし、クカリはもう止めておけばよかったのに、もう一遍言ったのだそうです。「お釈迦さま、まだ分からないんですか」と。お釈迦さまはもう一遍たしなめたそうですが、結局クカリの心は治まらなかった。まさにかつかと燃えるような怒りに、われを忘れるようなことになっていきます。

お釈迦さまに出遇っても、仏教がわかるとはいえない

先ほどご紹介した提婆達多も、このクカリも生きながら地獄に落ちたと言われます。地獄というのは、まさに怒りの炎に焼かれる状態が地獄ですね。死んだ後に行く世界ではありません。怒りに振り回されている、その生き方がまさに地獄であります。

クカリは、なぜ約束を破った舍利弗が擁護されて、約束をきちんと守っている私が叱られなければならないかと思ったわけですが、これはどうでしょう。私ほど教えをきちんと聞いている者はいない。私ほど立派な仏陀の弟子はいない。こういう執われです。

先ほどから申し上げたように、人と比べて私はまともだ、私は一番なのだという心です。まさに二千五百年前のお釈迦さまのお弟子の中にも、ちゃんとあります。あまり人間は変わっていないように思います。またお釈迦さまに出遇ったら、仏教がちゃんと分かるかということ、そうでもないということを、この方々は証明しているのです。

現在、私たちはお釈迦さまから数えて二千五百年、親鸞聖人から数えて七百五十年ですが、それだけ時間が経ってしまったので仏教が分かりにくくなったのかということ、それだけではないと思うのです。二千五百年前、お釈迦さまがおられるインドに生まれ合わせたとしても、仏のおこころはいただきにくいのです。

やっぱり俺が一番、相手の方よりも俺の方が上なのだという心がある限り、お釈迦さまに出遇っても気が付かない。今のクカリの話でもそうでしょう。お釈迦さまを尊敬しているところなら、「ああ、そうでしたか、お釈迦さま、私の考え方が間違っていました」と言えたはずなのに、お釈迦さまに完全に盾突いて、もうお釈迦さまの言うことを聞かないと。こういうことがあるわけです。

我を支える存在の大地

八百年前の親鸞聖人の時代でも、親鸞聖人が何度戒めても、やはり気が付かない。どっちが正

しく念仏を申しているかという争いが、比べ合いの執われの争いの心がなかなか見えない。

結局それは何が見えてないかという、親鸞聖人のお言葉に返せば「大地」です。我われは自分が生きているつもりですけども、実はそれを支えている大地がある。その大地の存在を忘れて、うわべだけを見て勝ったか負けたか、比べ合うばかりだと。

私たちがこの世に誕生してくることひとつ取ってみても、いろいろな縁が整わないと誕生できないわけです。例えば卵子と精子が出会って受精するという。このことひとつ取ってみても当たり前ではない。その受精した受精卵がお母さんのお腹の中で、十月十日育つという。これも当たり前ではない。

しばらく前、宇宙飛行士が帰って来られましたね。地球の重力の重さをあらためて感じたというお話をしておられました。カエルとか魚の受精卵を宇宙に持って行って、そこで果たしてふ化するかということ宇宙で何遍も実験していますね。ところがどれだけ時間がたっても、背骨ができないのですね。つまり受精卵としては何の間違いもない、温度や水分をちゃんと管理しているのに、上と下が分からないとオタマジャクシのかたちになっていかない。魚なら魚のかたちになっていかない。重力がないからです。

私たちもお母さんのお腹が健康であったからと思うかもしれませんが、それも確かにありますけれども、その全体を支えている、例えば重力があることによって成り立っているものがいっぱいあります。それを忘れているでしょう、うわべだけで。

まさに一日一日生きていくということになれば、たくさんのいのちを頂戴しながら私たちは生活をしています。お魚をいただき、肉をいただき、野菜をいただき、おコメをいただく。それらも全部、空気の力、雨の力、太陽の力、さらには大地の力で出来上がったものばかりです。

人間はそれだけ栽培の技術を発達させたとか、あるいはお魚の養殖技術が発達したと言っていますが、卵一つ作れない。種もみ一つ作れないと言われてます。これを増やす方法、培養する方法は確かに発達してきたかもしれませんが、でもそれにより逆にいのちを頂戴しているということを忘れております。たまに天候不順によって野菜が高騰すると、ああ、これが自然の力だねと、はっと思い出すことがあるぐらいです。安定供給されて値段がいつも一緒だったら、一年中何でも食べられると思っている。

そういうことも、だんだん分からなくなっている。年がら年中あるものだからです。つまり大地に支えられて生きている。それが実はいのちの事実です。私の力で生きていると考えたり、思ったりしがちでありますけれども、いっぱいいのちを頂戴しながら生きている。そういうことな

のです。

“いのち”を「いただきます」

これは去年のことではありますが、東京の小平の中学生が修学旅行に来るというので、たまたまその先生が知り合いという縁もありまして、東本願寺に参拝をしたいのだけれども、あそこでお話を聞かせてくれないかという声を掛けていただきました。大変初々しい感じで、話を一生懸命に聞いてくれるのです。何の話をしようかと思ったんですが、“いのちを食べながら生きる”という話をさせてもらいました。皆さんもご存じかもしれませんが、五年ほど前に森達也という人が『いのちの食べかた』という本を出されました。それを紹介して、私たちが食べている肉はどこから来ているか知っていますかと、そんな話から入ったわけです。

森さんは、と場、食肉加工場に丹念に現地調査に行かれて書いてくださっております。僕はその本を読んで、初めて具体的な今の方法を知りました。ピストルで撃っているのかと思っていましたけれども、ピストルで撃つとウシがすぐ絶命してしまうのです。体の中に血が残るとおいしい肉にならないのだそうです。だから今は何センチかのピンを撃って、そこに穴を開ける。そして延髄から脊髄まで一メートルほどのワイヤをずっと入れる。ウシは一瞬にして全身が麻痺するそうです。でもまだ心臓は動き続けています。その状態で首を落とすそうです。そうすると、心臓の力によって体内の血液が全部体の外に出されて、おいしい肉になるそうです。

僕らは出来上がったグラム幾らの肉は大好きなわけです。しかし森さんの本を読んで分かるのは、さっきまでモウモウと鳴いていた牛なのです。そのいのちをいただいている。そのことを本当に忘れないために、「いただきます」という言葉が大事なのだということ、あらためてその本を読んで感じたわけです。

「いただきます」は、いのちをいただいています。作ってくださった人にお礼を言うのは、「ごちそうさま」、「走り回ってくださってありがとうございます」です。「いただきます」の言葉は、いのちに対する感謝の言葉です。さっきの話で言えば、大地に支えられる。太陽のおかげ、雨のおかげでいただいている。そのことを確認する言葉です。

子どもたちは、本当によく聞いてくれたのです。ちなみに皆さんの中で、「いただきます」と言っている人はどれぐらいいますかと聞いてみました。そうしたら先ず先生の方から、学校では言いませんと言われました。ええっと思いました。これはいろんなことがあったそうですが、特定の宗教だと言って、批判を受けた時代もあったそうで、今はそんなことを表だって言う人は少ないそうですが、やっぱり自粛がかかるのです。どこかから批判が出たら困るということで、手を合わせて「いただきます」とは学校では言わなくなりましたということ、先生から教えていた

できました。

ではお家ではどう？と二百人ぐらいの生徒さんに聞きましたら、手を挙げてくれたのは四分の一ぐらいの人でしょうか。あとの人は、反応が悪い。言っているようで、言っていないような。あまりきちっとそこでは聞きませんでしたけれども、あとから先生にお話を伺うと、親がおられても、子どもより早く仕事場に出掛けられる、そういう環境だそうで、だから朝ごはんは、ほとんど子どもは一人で食べています。場合によっては朝ごはんを食べずに学校へ来る子どもも多いというお話を聞いたわけです。

教えられないと分からないこと

なかなか厳しいなと思いました。僕は初めから、「いただきます」を言わない子というのは、当然いると思ったのです。“言わないといけないよ”と話すつもりだったのですが、考えてみたら、自分もどうやって「いただきます」ということを言うようになったのかといたら、小さいころから言いなさいと言われて大きくなったわけです。それを家で言われることがなかったら、「いただきます」を言う必要があることすら思わなかったに違いないと思いました。

つまり、教えられなければ分からないんです。そんなこと“言って当たり前”だということではないのです。「いただきます」という言葉ひとつとってみても、これは教えられないと分からないわけです。

そのことで思い出したのですが、四年前のことです。十八歳の男子学生ですが、一回生のときに仏教の人間観、仏教が人間をどう観るかという授業でのことです。前期を終わってのレポートに「私はこの授業を受けて感動しました」と書いてあるんです。あとを読んでちょっと驚きました。本当なのかと思いました。どういうことかという、「私はこの授業を受けて、“子どもを授かる”という言葉は初めて聞きました」と書いてある。ええっと思いました。

これもよく考えてみると、確かにお家で聞く縁がなければ、外ではなかなか聞かないですね。実際テレビを見ていると、「子どもを何人つくりたいですか」というようなインタビューをして、「まだ欲しくありません」と。子どもは作ったり、作らなかったり、欲しかったり、欲しくないという言葉は日常的に聞こえますが、「授かる」という言葉は、あまりテレビから入ってくる言葉ではございません。

もちろん彼がどのように今まで家庭生活を送ってきたか、そこにいろいろあると思いますけれども、これも教えられなかったら分からないかということ、あらためて思わせられました。彼一人を責めて終わる問題ではないのですね。「子どもを授かる」ということを聞きにくい世の中、

あるいは「いのちをいただきます」ということも聞きにくい世の中、そういう世界を作っているのではないかと思います。

食べ物でも完全にそうですね。俺が作ったものをどうしようと勝手だもん。そういうことになる。いのちというよりも物です。そういうものの見方が全部、初めに言いましたが、最後には人を見る場合でも、使えるか使えないかということになっていく。今、申し上げたかったのは、そういういのちをどう見るかということも、教えられないと分からないということです。

中学生の知らなかったことを責めるように聞こえたかもしれませんが、それはそういう縁を生きてきたということなんです。その中で大きくなってこられたということであって、決して個人の素質という話で解消される話しではないのです。

その意味でいうと、私たち、この「いただきます」にしても、「子どもを授かった」という言葉にしても、次の代にはぜひとも伝えていかなければいけない大事な言葉だと思います。

でも、それだけでは足りないですね。どう生きるかということに関わって、根っこになるような言葉を伝えませんか、やっぱり最後の最後には勝ったか負けたかという世の中のものの見方が伝わっていくようになる。

世の中のものの見方の方は、ほっておいても伝わるんですね。小学校へ行く前ぐらいからかもしれないですね。幼稚園、保育園へ出れば、そこで共同社会の中に投げ込まれます。これは決して幼稚園の先生、あるいは保育園の保育士さんが悪いという、そんな話ではありません。どれほど比べ合って傷つき合うことが痛ましいかということをお伝えしようとしても、世の中の価値観の中で比べ合い、傷つき合いということが起こってくる。これが小学校、中学校となれば、いよいよ成績で人を計ることが一番のことようになっていくという。そういう風潮であります。

無量寿一計ることのできない世界

そのときに何を伝えなくてはならないかという、親鸞聖人は一番根っこになる“真理の一言”とおっしゃいますが、それがここに安置されている本尊です。南無阿弥陀仏というこの言葉に出遇わなければならぬ。この言葉に出遇わないと、私たちが比べ合うことを超えられないのだということをおっしゃる。

“アミダ”というのはインドの言葉ですが、親鸞聖人は先ほど唱えた『正信偈』の初めに「帰命無量寿如来」と翻訳してくださいます。「無量寿」と、物差しで計ることができないようないのち。先ほどからの話で言えば、一人ひとりがいろんなものに支えられながら、いろんないのち

に支えられながら、今日のいのちをつないでいる。空気のあることも、雨が降ってくださることも、全部が今日のいのちをつないでいる。何一つ欠けても、この存在はないわけです。

それをいただきながら生きている。今日は、これだけたくさんの方がお集まりですが、一人ひとりが誰とも代われません。誰の人生も交換できません。病気になったらつまらない人生か、違います。病気である自分をどう生ききっていくかということが、もっと大事なのです。健康な人と比べて自分は病気だからつまらない、そんなことはない。

若くて何でもできたときの自分と、今を比べて今の自分を貶めてしまう心も起きますが、年輪を重ねた自分、これも誰とも代わることはできない。もっと言えば、それまで年輪を重ねてきたお一人お一人が何ものにも代えられない重さを持っているというのが、この「無量寿」という世界です。

インドの言葉では「アミダ」です。そのアミダという世界に触れないと、私たちは人と比べて外見で計ったり、収入で計ったり、あるいはどれだけの業績を残したかということと比べると止められないという。阿弥陀が照らし出してくださる無量寿といういのちの世界。これを大事に生きていくというのが、南無阿弥陀仏という言葉です。南無阿弥陀仏に遇わないと物差しで計れないいのちに絶対に遇うことができないと、親鸞聖人はおっしゃるんです。

無量寿に出遇って欲しいという呼びかけ

大事なのは、親鸞聖人ご自身も、「南無阿弥陀仏」と、こう呼びかけられたのですね。「阿弥陀仏に南無してくださいよ」、「無量寿といういのちの世界に帰命しなさいよ」と呼びかけられたのです。一番近くで呼びかけてくださったのは法然上人でありますね。法然上人から阿弥陀の世界に出遇ってほしい、無量寿といういのちに出遇って欲しいと呼びかけられて、ああ、そんな世界があったのかとうなづいたのです。

これは宗祖ご自身のことで申し上げれば、親鸞聖人は比叡山で二十年修行なされた。その修行もお互いが傷つけ合うことを超えるための修行であります。ところが修行をやってみて分かったのです。二十年やったらやった分だけ、五年のやつよりは上だという心が湧いてくるわけです。また逆に、あいつにはまだ負けている、悔しいという心も起きてくる。二十年修行しても、その心が消えないのです。比べ合っただけを傷つけ合うことを離れるために、超えていくための修行であるはずなのに、修行したことが、また比べる材料になっていたという。ここに何とも愚かな自分というものにぶつからざるを得なかった。

そういう自分を引っさげて、こんな私は傷つけ合うことを超えることは無理でしょうかという

のが、法然上人の前に身を投げ出したときのお心であったのです。そうしたら法然上人がおっしゃるのは、「そんな根性がなくならないからこそ、阿弥陀という世界に出会いなさい。物差しで計れない無量寿といういのちを毎日毎日いただき直して生きてくれ」と呼びかけられた。

今日から比べることがなくなってしまうのなら、お念仏は要らないでしょうけれども、比べる心が湧いてくるからこそ、阿弥陀を思い出して生きていく。無量寿といういのちを大事に生きていけという呼びかけです。ですから比べ合う心がなくならない。あるいは人を傷つけるような根性を持っているからこそ、阿弥陀を念じて生きていくことが何よりも大事なんだということを知らされたわけです。

人間のもつ危うさ

阿弥陀仏を大事に生きていくということがはっきりすることは、親鸞聖人で言えば、愚かな自分がはっきりしたという。これは同時なのです。自分は何でもできている間は、阿弥陀の世界に魅力を感じないのです。やっぱり比べて、一步でも半歩でもステップアップしていく方に価値があると思うのです。

ところが、そうではないという世界に出会うのは、やっぱり自分の中の愚かな心、あるいはできたことができないようになってくる惨めさ、こういうことにならずくというのがとても大事なのです。これをくぐったときに、先ほど申し上げましたが、周りにいる人たちも、実は比べ合う敵ではなかったということが見えてくる。みんな弱い面を抱えながら、あるいは悩みを抱えながら、あるいは人から批判されたらどうしようとビクビクする心を抱えながら生きている、そういうお仲間だったわけです。

だから、愚かというなら、みんな愚かだという。これが親鸞聖人の人間観です。それから悪人と言ったら、みんな悪人。私たちはついつい分量で比べる癖が付いています。私も悪い根性を持っているかもしれないけれども、あの人はもっとひどいと、悪でさえ比べてしまうのです。私も人を傷つけたことがあるけれども、あんなひどい犯罪はしないと行ってテレビで起こった犯罪を見て、自分は善人の側に回ったつもりでいるわけです。でも親鸞聖人は、コメンテーターのような言い方をする人でも、人間というのは危うい。状況次第でどんなことでもしてかしてしまうものを持っていると言うのです。

この間のことで言えば、三歳と一歳のわが子を見殺しにしてしまった若い母親のことがニュースでありました。そんなのはもう母親と言えない。母親になる資格のないのが母親になったと言ってコメンテーターが言っていました。しかし、彼女とて誕生したときは喜んだと思います。それが自分の幸せを追い求める方に気持が行ったときに、わが子でさえも邪魔物にする。そういう

ところまで、人間というのは追い詰められたら何をするか分からないものを持っている。それが人間の危うさだと親鸞聖人はおっしゃっているのです。

さっきご紹介したお釈迦さまの弟子、提婆達多やクカリ。この人らはお釈迦さまの弟子として、よく教えを聞いていたわけです。ところが、お釈迦さまが自分の思うように反応してくれなかったら、そのお釈迦さまですら亡き者にしようと提婆達多は思うし、クカリはクカリで、もう腹が立って腹が立って、地獄に落ちることになる。

だから、今まで教えを聞いてきたから大丈夫だというほど簡単ではないんです。今まで教えを聞いてきても、そのことがふっ飛んでしまうような危うさを抱えています。その意味では、縁次第でどんなことでもしでかしてしまう。それが親鸞聖人の言う、我われ人間＝悪人という教えです。

もう一回言いますが、悪人であり愚かだから駄目だとおっしゃっているわけではありません。危ういものを抱えているからこそ、阿弥陀に導かれながら歩いていくことが何よりも大事だと教えてくださっているのです。

真宗を興された方、法然上人

親鸞聖人は法然上人を宗祖と仰いだ人です。先ほど読んだ『正信偈』では、法然上人のところで「真宗教証興片州」という言葉があります。「真宗の教えと証りを世界の片隅（片州）に興してくださった」ということです。

世界の片隅というのは、親鸞聖人からすればインドに興った仏教が、ようこそ中国、朝鮮半島を通過して、この日本にまで伝わってきたものだという、そんな思いがおありだからです。世界の端っこであるこの日本という国に、ようこそ仏陀の手が届いたものだというお心なのです。

それを日本の中で、本当の呼びかけをもって明らかにしてくださった。それが法然上人であるということが「真宗教証興片州」という言葉であります。また別のところでは、法然上人を「真宗興隆の大祖源空法師」とおっしゃっています。要するに法然上人が宗祖であるということ、はっきりとおっしゃった。

こういって、おかしいなと思う人もいると思います。法然上人は浄土宗の宗祖でしょう。浄土真宗の宗祖は親鸞聖人でしょうとおっしゃるのももっともです。これは浄土宗、浄土真宗という教団、宗派が出来上がってきた後で、それが定着してきたからです。今で言えば浄土宗は知恩院を本山となさいますし、我われ真宗大谷派は京都の東本願寺をご本山としている。これは教団で

あることは間違いない。その真宗大谷派は、親鸞聖人を宗祖といただいている。これも間違いない。

ただ、確認したいのは親鸞聖人ご自身は、「私は法然上人のおかげで真宗を教えていただいた」ということをおっしゃっているということです。自分で発明したのではないのだ。言葉を換えれば、法然上人がいなかったら、阿弥陀を大事にし、無量寿を大事にしようということを知らずに一生を終るところだったということです。この比べ合う必要のない世界を知らない、一生を終えるときまで比べ合いの人生です。勝ったか負けたか、と。

小松で第二土曜日に法座を持っておりますが、そこでたまに意見をお聞きする機会がありまして、「私の人生いろいろあったけれども、もっとひどい苦勞をなさった人と比べたら、私は幸せと思わなければなりません」という人がいたのです。ちょっと待ってくださいと言いました。それは自分よりもっと苦勞なさった方があると同感するのはいいですが、結局誰かを落として自分の方がまだましだったということになりませんか。つまり、満足しないとなりませんか、これでよかったと思わなければなりませんねというのは、実は心の底からは本当には満足していないということなのですね。私は私でよかった、人生を頂戴してありがとうと、どこで気がつくかという、それがさつきから申し上げている、本当に人と比べて自分を計るのではない、そんな世界との出遇いであります。

これはお経の中では、お浄土、阿弥陀の世界が詳しく書かれてあります。今日は中身にとでも入れませんが、そのお経を読むと、比べ合う必要のない世界が丁寧に詳しく書いてあります。

それを法然上人から教えていただいたというのが親鸞聖人の立っておられるところです。親鸞聖人は、法然上人を通して真宗に出遇われた。そして真宗を教えられた方であります。その真宗に一生を生きられて、さらには後の私たちに、これが大事だよと、かたちで残して下さった方です。これが親鸞聖人のご一生です。

苦勞の多い親鸞聖人のご生涯

私どもは、どうしても親鸞聖人を見るとき、鋼のような信心をもっていた方、あるいはお聖経を読み抜かれた方だと、そこら辺に注目するわけですが、親鸞聖人のご一生というのは、ご苦勞が本当に多いですね。

三十五歳のときには、国の罪人として越後に流されるわけでしょう。五年間、罪人の生活を送るわけです。その後も、新しい生活の場と拠点を求められて関東に出られる。四十二歳から六十

二歳あたりまで約二十年、関東におられたのではないかと推測されます。その後、いよいよ今度は、後の世に真宗を残していくために執筆活動に励まれて、最終的には京都でそれをたくさん書き残していけます。最後は八十八歳になっても筆を執っておられます。

その京都の生活というのは、自分の家がないのです。弟の尋有さんのところとか知り合いのところを転々としながら生活をする。六十歳を過ぎてから、わざわざ家のないところに戻っていきますでしょうか。さらには京都は弾圧を加えた旧仏教がある本拠地ですから、そこへ戻っていくことは、流罪、弾圧の中へもう一遍、身を投ずるというようなことにもなる。いわば周りとは戦いながらの生活だったのではないかと思います。

さらには晩年八十四歳のときには、関東で念仏者の間で混乱が起こった。そのことを鎮めるために、ご子息の善鸞さんを自分の代わりに送られるわけです。自分が関東に行けないということがあって、息子さんを信頼して送る。ところが善鸞さんが、かえって関東の混乱に拍車を掛けてしまうという事件が起きまして、最終的にはその息子さんと親子の縁を切るということになりました。

これも念のために申し上げますが、息子が憎くて出て行けという話ではありません。善鸞さんが親鸞の息子であることを利用して、人々の心を惹こうとする。そのことが問題だったのですね。つまり善鸞はもはや私の息子でないから、親鸞の息子であると言って寄ってきたとしても、それには乗せられるなという。極めて対社会的な義絶です。これが八十四歳のときの善鸞義絶です。

これもどうでしょうか。八十四歳になった父親が、五十歳前後と思われるが、五十歳前後の息子と親子の縁を切らないといけない。これは心穏やかではありません。ですから人間的に言えば、本当にご苦労の連続、いろんなことと格闘しながら、しかし、その格闘を通して、いよいよ大事な何かということを確認されていられる。これが宗祖のご一生なのです。

善鸞さんを義絶なさった八十四歳、年が明けて八十五歳になる二月に「弥陀の本願信ずべし」という夢のお告げを、もういっぺん見ておられる。いよいよこれだ、ということです。親鸞聖人の中にも息子を当てにして、息子を送れば何とかなるという思いがあったからこそ送ったのでしょう。それがかえって関東の混乱をひどくしてしまった。もしかすると、ああ、失敗したなと思われたかもしれません。

しかし、そのことを縁として、いよいよ依りどころとすべきは何かと言ったら、阿弥陀だと。このこと一つだと。ですから義絶した息子のことをお心に掛けておられたと思いますけれども、息子も縁によって阿弥陀と出遇ってくれば、善鸞にもちゃんと道が開かれるということを思われた。これが八十五歳のときの「弥陀の本願信ずべし」というお言葉だと、私は思うんですね。

苦悩の中を生き抜く力

言いたいのは、真宗に出会い、真宗に生きられたというご一生でありますけれども、それは決してずっと一本道ではないということを申し上げたい。私たちは教えに出遇ったら、あとは苦悩がなくなるかのように錯覚するのですね。そうではないです。どんな問題が起こってきて、また新たな苦勞をすることとなっても、その中を生き抜いていく力を阿弥陀さんからたまわるのですね。

阿弥陀さんにお会いしたら、後は楽でした。そんな話ではなくて、いろいろと起こってくる中を生き抜いていくときにこそ、いいとか悪いとか言うのではなくて、それを超えた世界に出遇って生きていくのです。その大事さを親鸞聖人は示してくださったとのことです。そういう意味で、阿弥陀が真の依りどころ。阿弥陀に南無しなさいという、この言葉が、私たちの日ごろの依りどころ。そのように親鸞聖人から残していただいていると思います。

そういう意味では、さっき途中で申し上げました「いただきます」という言葉も、なかなか次の世代に伝わらない。こういう世の中です。もっと言うと、南無阿弥陀仏という言葉に至っては通ずることが本当に難しくなっている時代です。

決して南無阿弥陀仏は呪文ではなくて、私たちの日々生きていく依りどころとなってくさる。日ごろは私たちの物差しを基準に生きているわけですが、そんなものを超えた世界に出遇うことの大事さを親鸞聖人はお示しくくださったということです。

同朋の励まし

そう申しましても、苦しみの中で、心が折れそうになることがあります。今まで聞いてきたことが、何も間に合わないことがある。そのときに大事なものは、お仲間なんです。親鸞聖人は、これを同朋という。親鸞聖人も同朋に励まされて、ものをお書きになったのではないかと思います。関東におられる同朋のことを念じながら、書物を書き連ねていかれたのではないかと思います。

ですから南無阿弥陀仏という言葉はたった一言であります。南無阿弥陀仏を通して、すでに亡くなられたご先祖に会うこともある。あるいは聞法を重ねられた方と共に南無阿弥陀仏という言葉を通して親鸞聖人の言葉が出てくることもあるかもしれない。あるいは南無阿弥陀仏を称えたら、かつて一緒に聞法会をしてきたお仲間のことが思い出されるかもしれない。

そういうことに励まされながら一步一步歩いていくという。これが日常の厳しさ、世間の手ご

わさに立ち向かっていくときには本当に大事なんだと思います。

蓮如上人は親鸞聖人の教えをどこで聞いてきたのかといたら、寄り合い談合なんですね。談合ということは、今はあまりいい意味に使われませんが、寄り集まって話し合っていく。そして大切なことを確かめ合っていくという、それが何よりも大事だということを教えてくださいました。

今日もそうではありますが、こういう会で、これだけの皆さま方が寄り集まるという、これはまさに何が大事なんだということを確かめさせていただきご縁であります。来年の御遠忌もこういうつもりでお迎えをさせていただきたいと思うことでもあります。

それでは最後にお念仏をご一緒にいただいて終わりたいと思います。合掌をお願いします。
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、…

※文責は東京四組にあります。小見出しも東京四組で付したものです。

※本文中の（）内の頁数は東本願寺出版部発行『真宗聖典』の出典頁数です。